

魔法の世界？私、魔法
とか使えないんですけ
ど？

嘆きのラジオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

京都百鬼夜行の戦闘にてあつさり死んだ3級術師、

「不動朽」、死の間際に呪力の核心を掴み、反撃を試みようとしたが、上空から降つてき
た呪霊に押し潰され

目を覚ましたらそこは魔法の世界だった

生まれ変わったのかと困惑したが何故か呪術が使えた彼女がもつ呪力という異能の
ため国立魔法大学附属第一高校に通うことになつたのだが

魔法と呪術の術式は異なるため朽は魔法が使えず、元の世界同様暗い生活を送る主人

一切魔法が使えない自分に比べ優秀過ぎる同級生に囮まれ嫉妬しながらも第二の人

生に適応しようと、努力していく物語

??・主人公の性格、「卑屈」

・現実改変+原作崩壊

・主人公補正により普段は弱いが、いきなり強くなる

・原作の触爛腐術、もう関係なくね？別物じやね？

・稚拙な文章

・術式がアレなのでグロ表現あり

主人公は司馬達也が嫌い、理由何でも出来るから

触爛腐術、「壞」「朽」

「腐」手のひらに触れた相手を腐らせる空間を生成

時間がかなりかかる上に手のひらを接触させていなければいけない

腐らせるといつても本来の腐るスピードを早めるだけのため1時間触れてやつと皮
が腐る程度

無機物には反応しない

「朽」原作と同じ、無機物にも適用

「壞」腐の強化版、無機物にも有効であり術式の範囲も手のひらから自身から半径1mに

拡大

消耗が激しく使い勝手の悪い

腐乱木、土を腐らせ呪力の籠つた腐葉土により植物の急成長を促す

主武器は包丁・・・呪力を流して攻撃、呪力による強化が目的で腐食はおまけ
術式の関係で武器の磨耗の速度が早くなるため、高い武器や呪具は使えないため

「金鎧」金属を腐らせ溶かし包丁の間合いを広げる

呪力を遠してため「腐」「壊」の併用も出来る

京都百鬼夜行
〔開戦〕

目次

京都百鬼夜行 「開戦」

時は京都の繁華街、夜、本来休日とは思えないほどガランとした街道、人の少ない町並みに不自然な黒の制服に身を包んだ集団

これから起ころる戦争の前に緊張に身を震わせながら16歳の少女「不動朽」は握りしめ不安を紛らわすように先輩の術師に話かけた

「あの・・・本当にこんなところで仕掛けてくるのでしょうか? も、もしかしたら嘘の可能 性も・・・数千の呪霊なんてそんな都合よくは」

「黙つてろ、上からの指示だ、真意はどうであれ私達は従うだけだ」

そう冷たく言う先輩の言葉には棘があつたが、自分と同じなのか呪具を握る拳は震えていた

戦争・・・認めたくない、呪術師は非術師のために戦うなんて言われているが死の覚悟が出来ている訳ではない

私のように死にたくない人間だつている、綺麗事だけでは命を賭けることなど出来ない

それにこれは人為的な戦争、元特級術師にして最悪の呪詛師「呪霊操術」という呪を

使役すること得意とする「夏油傑」それが主犯となり直接高専に宣戦布告したという
イカれた男

「氣を引き締めろ、油断すれば死ぬぞ」

先輩が激励するように力を込めて言うが

そんなことはわかっている、だが「死ぬかもしない」

そんな現実を押し付けられて平気でいられるほど私は強くはないのだ

御三家でもなれば名家の術師でもない私は死に怯えないほど強くはないのだ
震える腕を片方の腕で押さえつけ、深く深呼吸することで高鳴る心臓を落ち着かせる
死の恐怖に体は反応し額から体から冷たい汗が止まらない

普通ならこれだけの術師を揃えた呪術連合に軍配が挙がるだろう多数の名のある一
級術師や御三家、更に最強の術師五条悟がいる

だが敵がそれを知らないわけがない、そうとわかつて戦争を仕掛けるということは何
かしらの手段があり、絶対とはいかないまでも勝利に必要なプロセスを確立していると
いうことだ

二級や一級、いや下手をすれば特級の呪もいるかもしない

自分が生き残れるのか、死ぬのではないか、そんな疑念が頭を過る
負の感情で頭に埋めつくされる、

(死ねない、死にたくない!)

頭を左右に振り頭に浮かんだものを振り払う、緊張の中、不意にそんな行動をとる彼女に誰も怪訝な視線を送らない、皆が同じ思いなのだ

全員、不安で死にたくないのだ、逃げ出したい

「戦争、、だがこれは非呪師のために戦うのではない、自分が生き残るためぬ戦うのだ
「フウ、大丈夫、大丈夫、私は死はない」

ようやく落ち着いたのか、激しく鼓動していた心臓は今や落ち着きを取り戻した
ボソボソと周りには聞こえない声で、胸を撫で下ろし覚悟を決める

「来たぞ!!」

誰かが叫んだ、その言葉と共に正面の道路から上空から京都の町並みを覆うほどの大量の呪の群れがみえる

その波のような呪に一瞬体が強張る、

「フウ、大丈夫大丈夫大丈夫」

覚悟はしたつもりだがやはり怖いものは怖い、だが震えているだけでは生き残れない
呪具を構え、呪力を流す

全神経に呪力を巡らせ身体能力を強化する

(絶対に死ならない!!私は生き残る!!)

「死んだら絶対化けて出てやる・・・」

その彼女の呪いの言葉とともに京都百鬼夜行は始まつた
呪術師と呪の全面戦争の開戦だつた